

金澤文庫所蔵『法華玄贊文集』卷八十に引用される『中辺義鏡残』『破索牛車義文』『破法蔵師索車義文』について

蛭川祥美

要旨

蔵俊（一一〇四～一一八〇）撰『法華玄贊文集』は、慈恩大師基（六三二～六八二）撰『法華玄贊』に關連する經論疏を集め、法相教学の立場から『妙法蓮華經』を解釈した著述である。金澤文庫所蔵『法華玄贊文集』卷八十「索車諍文」の中、徳一（生没年不詳）撰『中辺義鏡残』第六上「破索牛車義文」の引文と、『中辺義鏡残』第六「破法蔵師索車義文」の引文について、翻刻、書き下し、大意を示した。これらの引文は、『妙法蓮華經』の三車火宅の喩について、三周の説法とからめて、菩薩が牛車を索めることの意味を探るものである。「破索牛車義文」には、天台宗の智顛（五三八～五九七）が、菩薩には牛車を索める者も、索めない者もいるとするが、徳一は、菩薩は牛車を索めるのだとして、天台宗の教学批判がなされている。「破法蔵師索車義文」には、華嚴宗の法蔵（六四四～七一三）と、それを引用する最澄（七六六もしくは七七七～八二二）は臨門の牛車を大乘、露地の牛車を一乗とするが、徳一は臨門の牛車と露地の牛車、さらには、大乘と一乗も同じものであるとして、華嚴宗や天台宗の教学批判をするのである。

キーワード 徳一・索車・智顛・法蔵・最澄

序

平安末期の法相宗の学匠、蔵俊（一一〇四～一一八〇）撰『法華玄贊文集』は、慈恩大師基（六三二～六八二）撰『法華玄贊』に關連する經論疏を集め、法相教学の立場から『妙法蓮華經』を解釈した著述である。

現在、金澤文庫には、称名寺蔵『法華玄贊文集』が四帖所蔵されており、その表題はそれぞれ以下の通りである。

- ① 法相 法華玄贊文集八十 一乗義 三車五 索車諍文
- ② 法華玄贊文集八十六 一乗義 無余二
- ③ 法華玄贊文集八十九 一乗義 無余五
- ④ 法華玄贊文集九十 一乗義 無余六

本論文で考察を試みる①は、一乗義の中、『妙法蓮華經』譬喩品第三の「三車火宅の喩」について述べた段の五冊目にあたり、その構成は、以下の通りである。

- 「一乗義 三車五」
 - 一、慧沼（六四九～七一四）撰『法華玄贊義決』（大正三四・八六八・中～下）引文
 - ・・・墨付一丁表一行～一丁裏九行
- 二、護命（七五〇～八三四）撰『法華義決解節記』四（不明）引文
 - ・・・墨付一丁裏十行～三丁裏八行
- 三、基撰『法華玄贊』五（大正三四・七四九・下～七五〇上）引文
 - ・・・墨付三丁裏九行～五丁裏十行
- 四、蔵俊自説
 - ・・・墨付五丁裏十一行～六丁裏十一行

「索車諍文」

- 五、徳一（生没年不詳）撰『中辺義鏡残』第六上「破索牛車義文」（不明）

・ 墨付六丁裏十二行、十二丁裏四行
六、徳一撰『中辺義鏡残』第六「破法蔵師索車義文」(不明)

・ 墨付十二丁裏五行、十四丁表十行
七、徳一撰『中辺義鏡残』七「索車義残決」(不明)

・ 墨付十四丁表十一行、二十四丁表一行

本論文では、五、徳一撰『中辺義鏡残』第六「破索牛車義文」、「破法蔵師索車義文」について、翻刻、書き下しを行い、大意を記した。

尚、ここまでの所述は、拙稿「金澤文庫蔵『法華玄贊文集』巻八十について」(『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』第十九号・二〇一九年・三月)を参照されたい。

一、「中辺義鏡残」「破索牛車義文」、「破法蔵師索車義文」翻刻

墨付六丁裏

破索牛車義文

13 中辺義鏡残六上云々。

墨付七丁表

1 天台智者法師云。凡居不達之地。何有不索之理。由索

2 故許与。許与故欲喜。今文具与請与歡喜。法説中千

3 二百人。身子為首。慇懃三請。菩薩衆中弥勒為首。仏口所生子

4 大數有八万。合掌以敬心。欲聞具足道。譬説之初。身子為

中

5 根人。又総為四衆。請。傍為下根。請。文云。善哉世尊。願為

6 四衆。説其因縁。法説許云。汝已殷勤三請。豈得不説。譬説

7 許云。当以譬喻。更明此義。因縁許云。我及汝等宿世因縁。吾

今

8 当説。法説竟身子欲喜。譬説竟迦葉等欲喜。宿世因縁竟

9 富樓那欲喜。又合譬文云。令諸子等日夜劫數常得遊戯。

10 与諸菩薩。乘是宝乘。直至中道場。以喜故知。与。与故知。請

三周三義明

11 文炳然。何故偏言。乘索。車菩薩大子不索。車。今當為爾分

12 別説之。自有不断。惑不索。車。三蔵菩薩是。自有不断。惑索

墨付七丁裏

1 車。通教菩薩是。自有亦断。惑亦不断。惑亦索亦不断。別教菩

薩

2 是。自有非断。惑非不断。惑非索非不断。円教菩薩是。已上

出彼

3 師所造法花文句第五。今謂。不断。弁惣破之。彼別々破。惣破者彼

自

4 座諸師所説。牛車体。述自義云。依天台智者。明諸法

5 実相。正是牛車体。汝所。言諸法実相者。即是真如。汝理

6 此真如理。菩薩大子。先已随分。証三乘。云何故更索。若言。為他

7 未証者。請説。顯者不爾。彼真如妙理。言語道断。心行所識

8 証智。由証以言。顯之。於生何益。又法花三周中。唯授三乘

9 作一仏記。不授菩薩。何故汝称。請故与。已上惣破。彼別之

破者

10 彼云。菩薩衆中。弥勒為首。仏口所生子。大數有八万。合掌以

11 敬心。欲聞具足道。此亦不断。經文中。唯有仏口所生子。

12 以下文与。願無有。菩薩衆中。弥勒為首。如何加妄迷。

墨付八丁表

- 1 彼字徒此亦不_レ為_レ菩薩索_二牛車_一証_上。於_二三周_一不_レ授_二菩薩記_一。如何_レ。
 - 2 称_二請故与_一。彼菩薩大子索_レ与_レ不索俱無_レ有_レ失。何者地前菩薩修_二有漏三慧_一求証_二初地_一。如_レ上前修_二無漏三慧_一求証_二仏果_一。此名_二菩薩_一。
 - 4 大子_二索_二牛車_一。然_二三周中不_レ記_二菩薩_一故大子不_レ索_二車_一。故知。大子_一。
 - 5 索俱与_レ不_レ索俱無_レ有_レ失。又云。彼釈合譬文云。令_レ諸子等日夜劫数常得_二遊戯_一与_二諸菩薩_一乘_二是宝乘_一直至_中道場_上。以_レ喜故知_レ与_レ故知_レ請。三周義明文炳然。何故偏言_二一乘索_レ車菩薩大子不_レ索_レ車_一。此亦不_レ爾。汝不_レ知_二索_レ車義_一。徒設_二劬勞_一。汝所_レ引文有_レ誤_二四_一。
 - 9 衆_レ故。我更引_レ經云。与_二諸菩薩及声聞衆_一方此經文不_レ為_二大子索_レ車証_一。凡法喻相順方成。喻合_二前之法品_一唯有_レ索_レ車無_レ有_レ乘_レ車。彼合_二譬文_一唯有_レ乘_レ車無_レ有_レ索_レ車。既此喻至背_レ違。如何成。今彼廻心向大声聞及頓悟菩薩從_二本名_一曰_二声聞_一非_レ実声聞。若不_レ爾者舍利弗等廻心向大受_二仏記別_一。
- 墨付八丁裏
- 1 以_レ彼但名_二菩薩_一不_レ名_二声聞_一。何經与_二菩薩声聞_一乘_二此宝車_一直至_二道場_一。且如_二舍利弗等受記_一以_レ彼遲_二三万劫_一方到_二十信_一。爾時但名_二菩薩_一不_レ名_二声聞_一。從_レ此彼受遲_二一僧祇_一方至_二初地_一。爾時但名_二菩薩_一不_レ名_二声聞_一。云何經云。菩薩声聞乘_二此宝車_一直至_二道場_一。由_二

- 5 此道理_二漸悟菩薩從_二其本名_一名為_二声聞_一者豈各乘_二牛車_一耶。由此因車_二遲_二僧祇_一登_二妙覺位_一。証_二四智_一中一切種智。爾時方各乘_二宝牛車_一。是故經云。与_二諸菩薩及声聞衆_一乘_二此宝車_一直至_二道場_一。若菩薩大子不_レ索者便違_二今文_一。譬喻品牛車合云。若有_二衆生_一從_二仏世尊_一聞_レ法信受慇懃修_二精進_一求_二一切智佛智自然智無師智如来知見力無所畏_一。愍_二念安_一樂無量衆生_二利益天人_一度_二脫一切_一。是名_二大乘_一。如_二彼諸子_一為_レ求_二牛車_一出_中於火宅_上。准_二此等文_一菩薩大子於_レ索_二牛車_一体_一亦無_レ妨。又彼云。法花說中千_二三百人_一身子為_レ首慇懃
- 墨付九丁表
- 1 三請。法說許云。汝以_二殷勤三請_一豈得_レ不_レ說。法說竟身子歡喜。今問。汝所_レ言法說中身子三請者為_レ索_二羊鹿車_一為_レ索_二牛車_一。若言_二唯索_一羊鹿車_一非_二索牛車_一者有_二七失_一。一得已更索失。二違_レ文失。三違_レ許与_レ失。四違_レ遮失。五違_レ歡喜失。六違_レ喻文失。七違_レ合失。言_二一得已更索失_一者且如_二舍利弗等千_二三百人_一於_二初四諦教時_一已於_二分断宅_一已得_二乘無學果_一已乘_二羊鹿車_一。何故至_二法花会_一更索_二羊鹿車_一。言_二違_レ請文_一失_上者法花說_二初身子請_レ言。何故慇懃称歎方便而作_二是言_一。仏所得法甚深。雖_レ為_二直所言說_一意趣難_レ知。一切声聞辟支仏等不能_レ及。是則請_二仏智慧門_一。此是索_二牛車_一。云何称_二索_レ車羊鹿_一。
 - 11 車。三違_レ許与_レ失者汝已慇懃_二三請_一豈得_レ不_レ說。如_レ是妙法諸仏如来時乃說。諸仏世尊唯以_二一大事因縁_一故出_レ現於_レ世。

墨付九丁裏

- 1 此即許与智及智門。此是許牛車。云何称索羊鹿車。四
 - 2 違遮失者經云。如來但以一仏乘。故為衆生說法。無余
 - 3 乘若二若三。是則遮無二乘。而說仏智及智門。此是
 - 4 許牛車。云何称索羊鹿車。五違歡喜失者法說意。
 - 5 譬喻品初身子歡喜云。今從仏聞所未曾有法。斷諸疑悔。
 - 6 身意泰然。此則聞許与仏智及智門与歡喜。此是聞許
 - 7 与牛車与生歡喜。云何称索羊鹿車。六違喻文失者
 - 8 譬喻品云。爾時長者各賜諸子等一大車。此則喻先許与仏智
 - 9 及智門。云何称索羊鹿車。七違合文失者譬喻品牛車
 - 10 合文云。如來亦如是。初說三乘。然後但以大乘而度脫
 - 11 之。准
 - 12 此等文。明如舍利弗等千二百人。唯請牛車不索鹿車。若
- 言身子等唯索羊鹿車者便違合文。譬喻品合羊
- 墨付十丁表
- 1 鹿車文云。若有衆生。內有智性。從仏世尊。聞法信受。慳精
 - 2 進欲速出三界。自求涅槃。是名聲聞乘。如彼諸子為求羊
 - 3 車。
 - 4 出於火宅上。若有衆生。從仏世尊。聞法信受。慳精進求。自
 - 5 然慧樂。獨善寂。深知諸法因緣。是名辟支仏乘。如彼
 - 6 諸子為求鹿車。出於火宅上。由斯有生理身子等千二百人。若
 - 7 索牛車。若索羊車。而俱有失。汝偏執文。不知索車
 - 8 意。謬於請文。自招過失耳。人然三乘各別索。自乘車。不
 - 9 索他乘。譬喻品說故。問。若爾舍利弗等千二百人。先得
 - 10 自乘三學果。已乘羊鹿車。何故至法花會。更重索耶。答。

- 10 雖得自乘無學果。而更修妙智。求知諸法。以義各求羊鹿
 - 11 車。問。若爾何故舍利弗慳三請仏。慧及智慧門。許說仏
 - 12 智及智門。答。此為決自他疑。請說不懸索車義。何以知
- 就論。方

墨付十丁裏

- 1 便品五分中第三定疑分之二乘之人。於自所証生決定
 - 2 解。三乘解脫床等。於仏智及門。一乘不知。後更
 - 3 疑生。依斯請決疑。所以不心索車義。此第三分意
 - 4 也。次第四定疑分云。汝已慳三請。豈得不說等。此則
 - 5 記別甚深一乘義。此第四分意也。亦不心許与牛車
 - 6 義上。古人不不知此義。引此等文。証大子索牛車。甚愚癡
 - 7 也。又彼云。第二周譬說之初身子為中根人。請。譬說許云。
 - 8 当以譬喻更明此義。譬說竟迦葉等歡喜。此第二周請
 - 9 許喜。亦周前第一周上根請許喜。唯許与中但許因
 - 10 智一齊。故称竟前。又彼云。為第三周下根。徒請。文云。善哉。
 - 11 世尊。願為四衆說其因緣。譬喻品。因緣許云。我及汝等。宿世
 - 12 因緣。藥草喻品。因緣竟樓那歡喜。五百弟子受記品。以喜故与故知
- 墨付十一丁表
- 1 請。三周三義明文炳然。何故偏言二乘索車。大子不索車。
 - 2 此師所言第三周請許喜。攔同初二周唯許与中許与仏果
 - 3 宝所理一乘智。請牛車。以為竟前。今却觀天台三周請許
 - 4 喜意。顯三子各別索羊鹿牛車。若爾者不唯還隨之。
 - 5 七失亦復違法花本意。法花本意是欲与羊鹿車耶。汝
 - 6 不知索車。竟偏依文句。執三乘共同索三車。甚愚癡耳。

- 7 今觀三周許与文及聞歡喜文。唯聞許与仏智及智門之中
- 8 車与歡喜者准此。此應知。三周請文唯請仏智及智門之牛車。
- 9 不索羊鹿車。問。若爾違合。譬喻品云。時諸子等各白。父
- 10 言。父先所許羊車鹿車牛車願時賜与。爾時長者各賜
- 11 諸子等一大車。下合下文云。若有衆生。乃至。是名声聞乘。
- 12 如彼諸子
- 為求羊車。出於火宅下。若有衆生。乃至。是名辟支仏乘。
- 如彼諸子

墨付十二丁裏

- 1 為求鹿車。出於火宅上。若有衆生。是名大乘。如下彼諸子為
 - 求牛
 - 2 車。出於火宅上。若言。子索羊鹿車者便違。法花方便品云。
 - 3 唯有二乘。無三。故法喻既別。云何成合。各法花本
 - 4 意為別退大乘。後本所習。非余意趣。則如喻品顯
 - 5 四十年前三乘。故。三子各別索三車。法品顯法花會一
 - 6 乘。故。有一乘。無二。無三。此後云何四十年前舍利弗等二乘
 - 7 根機未熟。說於一仏乘。分別說三。此則顯示說有三
 - 8 乘。此合捨二乘与。当得一仏乘。各有三乘。至法花
 - 9 會。不定性。乘根機。熟堪受。仏記。故。說。唯有二
 - 10 乘。無二。無三。天台難。菩薩不索車會。其五。唯此一事
 - 11 實。即此真。那忽復索。被會絕待之唯一外更無
 - 12 法。昔待二之唯一外更有法。一名同而体異。此師應
- 墨付十二丁表
- 1 顯法花円教一乘絕待之唯一外更無法。欲称唯此一事實。

- 2 三乘之中大乘待二乘之唯一故。一外更有二乘異。故。不称
- 3 唯此一事實。此難不。理。何以故三乘之外更立第四円教一乘。
- 4 前已破証。故徒設詰。天台詰難。菩薩不索車人者。其八。若菩薩
- 5 索菩薩車。心領解既無。故知不索。汝不聞。法說。竟。天龍四
- 6 衆皆領解。其非菩薩。謂是何耶。又法品中三乘皆与記。若
- 7 不領解。那忽与記。汝空設詰難。兼說妄語。汝所言。法說
- 8 竟。天龍四衆皆領解者。譬喻品云。爾時四部衆比丘比丘尼
- 9 優婆塞優婆夷天龍八部見舍利弗於仏前。受阿耨多羅
- 10 三藐三菩提記。心大歡喜。此見他受。仏記。而生隨喜上。如何此証
- 菩薩索

墨付十二丁裏

- 1 配自四教。与別簡別徒設劬勞。何以故自造教各配。属仏經
- 2 前已破証。故不可用。如此推究天台所立三乘中大乘権円
- 3 教一乘。實水牛権白牛。實者唯有虚言。都無實義。是
- 4 故。心信三乘之解。更無別乘。
- 5 破法藏師索車義文
- 6 法藏師云。若彼三中牛車。是實者。如何出竟。以不。得。故。後。更
- 7 索耶。亦不可。說。界外索。車。但是二乘。以經不。說。不。說
- 8 彼求牛車。人出。門。即得。彼牛車。故。是。故。經。云。諸子得。出。至
- 9 露地。已。各自。交言。父先所許。羊車鹿車牛車。願時賜与。
- 10 以此得。知。三車同索。乃至。為欲。廻。彼。三人。入。中。一。乘。上。故。是

- 11 大乘亦說_レ廻也。已上出_レ被五教記上卷_一。今謂。不_レ爾。汝迷_二門外_一迷_レ出_二露地_一。
- 12 言_レ迷_二索車義_一。今當指示。門外有_二。一分段宅門外。二變易宅門外。分段宅門外者此亦有_レ。二乘分段宅門外。

墨付十三丁表

- 1 二菩薩分段宅門外。二乘門外者二乘不_レ得_二無學果_一。離_二分段死_一。
- 2 永出_二三界_一。是名_二門外_一。亦如_二舍利弗等_一。二乘得_二無學果_一。出_二分段門外_一。離_二三界_一。而未_レ乘_二牛車_一。為_レ得_二乘_二牛車_一。修_二習三慧_一。求_二初地_一。是名_二索牛車_一。法花會中受記以_レ彼遲_二二万劫_一。方到_二十信_一。猶名_二索牛車_一。不_レ名_二索羊鹿車_一。從_レ此後更遲_二一阿僧祇_一。至_二初地_一。時方名_二索牛車_一。頓悟菩薩証_レ於_二初地_一。永出_二分段死_一。是名_二門外_一。
- 7 是頓悟漸悟以_レ義名_二三乘子同乘_一。一牛車。而猶名_二三子索牛車_一。不_レ名_二索羊鹿車_一。何以故廻心向大。厭_レ捨_二乘_一故。○_所言變易門外
- 9 者從_二初地_一更遲_二二阿僧祇_一。登_二妙覺位_一。永出_二變易宅_一。是名_二變易門外露地_一。唯門外可_レ知_二彼所難_一。若彼_二中牛_一亦是實者如何。出_レ竟以不_レ得_二故後更索耶_一。今我具指_レ示_二外門_一。指_レ示_二索車義_一。不_レ可_レ更迷_一。且如_二身子等_一。二乘無學。廻心向大捨_二分段身_一。得_二變易身_一。修_二習三慧_一。求証_二初地_一。是名_二出_二分段宅門外_一。索牛車_上。

墨付十三丁裏

- 1 不_レ名_二索車_一。不_レ實故更索_二實車_一。彼身子等漸悟菩薩証_二初地_一。已後更修_二習無漏三慧_一。求証_二仏果_一。是名_二索牛車_一。非_レ謂_二彼初地所証_一。

- 3 妙覺平等中一切種智不_レ實故。更索_二實車_一。不_レ爾。詮_二下地_一進超_二上階_一。応名_二詮_二大乘_一。得_二一乘_上。若爾_二三乘中大乘_一是頓悟_下。詮_二頓悟_一得_二漸悟_上。又彼難云。亦不_レ可_レ說_二界外索車_一。但是_二二乘_一。以_レ經不_レ說_二彼求_二牛車_一人_上。出門即得_二彼牛車_一。故者此亦不_レ爾。汝由_レ執_二臨門牛車_一與露地白牛_一。權實各別。亦不_レ知_二索車義_一。如是迷_レ惑此義。前開_レ示指_レ授故不_レ更述。汝不_レ知_二法花意_一。妄設_二詰難_一。法花大意為_レ引_二退大_一。二乘不_レ合_二得_二大乘_一。非_レ別意趣。不定性_二二乘_一之身中具有_二三乘種姓_一。四十年前以_二其大乘根未熟_一。故不_レ厭_二二乘_一。不_レ欣_二大乘_一。說有_二三乘_一。故說於_二一仏乘_一。分別說_二三_一。至_二法花會_一。其根淳熟堪_レ聞_二授記_一。厭_二劣_二二乘_一。欣_二勝大乘_一。故說_二唯有一乘_一。無_中有_二一乘_上。依_レ斯有_二理_一。舍利弗。

墨付十四丁表

- 1 等以_レ義名為_二三乘衆_一。捨_二乘衆_一。得_二一乘_一。合名_二三乘_一。而名_二三子_一。非_レ言_下。
- 2 決定菩薩決定_二獨覺_一。決定_二聲聞_一。名為_二三乘_一。而名_二三子_上。何以故於_二法花會中_一。不_レ授_二決定_二乘_一。作_二仏記_一。亦不_レ授_二決定_二菩薩_一。作_二仏記_一。故
- 4 決定_二三乘_一。不_レ名_二乘_一。一牛車。不_レ入_二三子數_一。問。決定_二三乘名_一。三子。
- 5 乘_二一牛車_一。有_二何妨_一。不_レ許。答。決定_二乘_一各有_二一姓_一。無_レ有_二勝姓_一。
- 6 於_二何勝姓_一。從_二何劣姓_一。說。於_二一仏乘_一。分別說_二三_一。亦後詮。何劣姓得_レ何
- 7 勝姓_一。說。唯有一乘。無_レ二無_レ三。然菩薩大子索與不_レ索俱無_レ有。

- 失。
- 8 前已数述。是故汝所_レ難大子出_レ門_レ於_レ索_レ車故大乘権於_レ此唐捐。
- 9 故汝今当_レ知。臨門牛車即露地白牛。露地白牛即臨門牛車。
- 10 則知_二大乘則一乘_一乘即大乘_一。此_二之体無_レ二無_レ別_{云々}。

二、『中辺義鏡殘』『破索牛車義文』、『破法藏師索車義文』書き下し

牛車を索める義の文を破す。

『中辺義鏡殘』六上に云々。

天台智者法師云。『凡そ不達の地に居するに、何ぞ索めざるの理有るや。索むるに由るが故に許し与う。許し与えるが故に歡喜す。今文に具に請うと歡喜を与えると有り。法說中「千二百人、身子を首と爲し、慇懃に三たび請う。菩薩衆の中、弥勒を首と爲して、仏口より生ずる所の子は、大数、八万有り。合掌し敬心を以て、具足道を聞かんと欲す」^①と。譬說の初には、身子は中根人の為に、又、総じて四衆の為に請う。傍に下根の為に請う。文に云わく。「善哉世尊。願わくは四衆の為に其の因縁を説きたまえ」^②と。法說に許して云わく。「汝は已に殷勤に三たび請う。豈に説かざることを得るや」^③と。譬說に許して云わく。「当に譬喩を以て更に此の義を明かすべし」^④と。因縁に許して云わく。「我及び汝等の宿世の因縁を、吾れ今当に説くべし」^⑤と。法說に富樓那は歡喜す。譬說の竟りに迦葉等は歡喜す。宿世の因縁の竟りに劫数に、常に遊戲を得るに、諸の菩薩と、是の宝乘に乗じて、直ちに道場に至ら令む」^⑥と。喜を以ての故に与えるを知る。与えるが故に請うを知る。三周の三義を明かす文は炳然なり。何の故に、偏へに二乗は車

を索め、菩薩大子は車を索めずと云うや。今、当に爾^{なほ}が為に分別して之れを説くべし。自ら惑を断ぜずして車を索めざること有り。三蔵の菩薩是れなり。自ら惑を断じて車を索むる有り。通教の菩薩是れなり。自ら亦た惑を断じ、亦た惑を断ぜず、亦た索め、亦た索めざること有り。別教の菩薩是れなり。自ら惑を断ずに非らず、惑を断ぜざるに非らず、索めるに非らず、索めざるに非らざること有り。円教の菩薩是れなり」^⑦

と。已上、彼の師の造る所の『法華文句』第五に出す。

今謂わく。爾らず。惣じて之れを破すと、彼の別々に破すを弁す。惣じて破すとは、彼の自序の諸師の牛車の体を説く所に自義を述べて云わく。「天台智者に依りて、諸法の実相を明かせば、正しく是れ牛車の体なり」^⑧と。汝の言う所の「諸法の実相とは、即ち是れ真如なり」^⑨と。汝の理は此れ真如の理なるも、「菩薩大子は先ず已に分隨いて三乗を証す」^⑩と。云何なる故に更に更に索めるや。若し他の未だ証さざるが為にと云うを、説くを請うと顯すことは爾らず。彼の真如の理は、言語道断にして心行の識る所の証智なり。証に由りて言を以て之れを顯す。生に於いて何の益あるや。又、「『法華』の三周中、唯だ二乗のみ仏の記を作すを授く。菩薩には授けず」^⑪と。何故に汝は、請うが故に与えるに称うとするや。已上、惣じて破すなり。彼の別に破すとは、彼に云わく。「菩薩衆の中、弥勒を首と爲す。仏口より生じる所の子、大数八万有り。合掌し敬心を以て、具足道を聞かんと欲す」^⑫と。此れ亦た爾らず。經文中に唯だ「仏口より生じる所の子」^⑬と有り。以下の文に「願を与う」は有ることなし。「菩薩衆の中、弥勒を首と爲す」とは、如何に妄りに迷いを加えるや。彼の学徒、此れ亦た菩薩の牛車を索める証と爲らず。三周に於いて菩薩の記を授けず。如何に請うが故に与えるを称うとするや。彼の菩薩大子の索めれば俱に与え、索めざれば俱に失うこと有ること無し。何ぞ地前の菩薩、有漏の三慧を修し、求めて初地

を証す。上の如く前に無漏の三慧を修して求めて仏果を証す。此れを菩薩大子と名づけ、牛車を索む。然るに三周中には菩薩は記とならざるが故に、大子は車を索めず。故に知りぬ。大子の索めれば俱に与え、索めざれば俱に失うこと有ることなし。

又た云わく。彼の釈に「譬と合する文に云わく。諸子等、日夜の劫数なるも常に遊戯を得さ合む。諸の菩薩乘に与えるは、是れ宝乘にして直ちに道場に至るなり。喜ぶを以ての故に与えるを知る。与えるが故に請うを知る。三周三義を明かす文は炳然なり。何の故に、偏へに二乗は車を索め、菩薩大子は車を索めずと言うや」といふ。此れ亦た爾らず。汝は索車の義を知らず。徒に劬勞を設ける。汝の引く所の文の「四衆」^⑤に誤り有るが故に。我れ更に経を引きて云わく。「諸菩薩、及び声聞衆に与う」^⑥と。方に此の经文は、大子の車を索める証とは為さず。凡そ法諭の相に順じて方に成ず。諭に前の法品を合して、唯だ車を索めること有り、車に乗ること有ることなし。彼は譬文を合して、唯だ車に乗ること有り、車を索めること有ることなし。既に此の諭に至りて違に背く。如何成ずるや。今、彼の廻心向大の声聞、及び頓悟の菩薩は、本の名に従いて、声聞と曰い、実の声聞にあらず。若し爾らざれば、舍利弗等は廻心向大して仏の記別を受く。彼を以て但だ菩薩と名づけ、声聞とは名づけず。何ぞ経に、「菩薩と声聞に与え、此の宝車に乗じて直ちに道場に至る」^⑦というや。且く舍利弗等の受記の如く、彼を以て二万劫遅れて、方に十信に到る。爾の時、但だ菩薩と名づけ、声聞と名づけず。此れに従いて、彼の受は一僧祇遅れて、方に初地に至る。爾の時、但だ菩薩と名づけ、声聞と名づけず。云何が経に云わく。「菩薩・声聞は、此の宝車に乗じて直ちに道場に至る」^⑧と。此の道理に由りて、漸悟の菩薩は其の本の名に従い、名づけて声聞と為すに、豈に各牛車に乗る耶。此の因車に由りて、二僧祇遅れて、妙覺位に登る。四智

を証する中、一切種智なり。爾の時、方に各宝の牛車に乗る。是の故に経に云わく。「諸菩薩及び声聞衆に与え、此の宝車に乗じて直ちに道場に至る」^⑨と。若し菩薩大子が索めざれば使ち今文に違す。譬諭品に牛車を合して云わく。「若し衆生有りて、仏世尊従り法を聞きて信受し慇懃に精進を修し、一切智・佛智・自然智・無師智と如来の知見・力・無所畏を求め、慇懃して無量の衆生を安樂せしめ、天・人を利益し一切を度脱せしむ。是れを大乘と名づく。彼の諸子の牛車を求めるが為、火宅を出るが如し」^⑩と。此等の文に准じて、菩薩大子、牛車の体を索むるに於いて、亦た妨げ無し。

又た彼の云わく。「『法花』の説の中、千二百人は、身子を首と為し、慇懃に三たび請う。法説に許して云わく。汝は殷勤に三たび請うを以て、豈に説かざることを得んや」^⑪と。法説の竟りに、身子は歡喜す。今問う。汝の言う所の「法説中に身子が三たび請うとは、羊鹿車を索めんと為し、牛車を索めんと為す。若しくは唯だ羊鹿車を索め、牛車を索むるには非らずと言う」^⑫とは、七失有り。一に得て已に更に索むる失。二に文に違す失。三に許し与うに違す失。四に遮に違す失。五に歡喜に違す失。六に諭の文に違す失。七に合するに違す失。一に得て已に更に索むる失を言はば、且く舍利弗等の千二百人の如く、初の四諦の教の時に於いて、已に分断の宅に於いて、已に二乗の無学果を得て、已に羊・鹿車に乗ず。何故に法花会に至り、更に羊・鹿車を索むるや。請う文に違する失と言はば、『法花』に「初に身子は言を請う」^⑬と説く。何故に慇懃に称歎し、方便して、而して是の言を作すや。仏所得の法は甚深なり。直ちに所言の説と為すと雖も、意趣は知り難し。一切の声聞・辟支仏等及ぶことあたわず。是れ則ち仏の智慧門を請う。此れは是れ牛車を索む。云何、車を索むるに羊・鹿車に称うや。三に許し与うに違す失とは、汝は已に慇懃に三たび請うに、豈に説かざるを得ん

や。「是くの如き妙法を、諸仏如来は時に乃ち説く。諸仏世尊は、唯だ一大事の因縁を以ての故に世に於いて出現す」^⑧と。此れ即ち智及び智門を与えるを許す。此れは是れ牛車を許す。云何、羊鹿車を索むるに称うや。四に遮に違す失とは、経に云わく。「如来は但だ一仏乗を以ての故に、衆生の為に説法す。余乗の若しくは二、若しくは三なし」^⑨と。是れ則ち二乗なしと遮し、而して仏智及び智門を説く。此れは是れ牛車を許す。云何、羊鹿車を索むるに称うや。五に歡喜に違す失とは法説の意なり。譬喩品の初に身子の歡喜して云わく。「今、仏従り聞く所の未曾有の法は、諸の疑悔を断じ、身も意も泰然なり」^⑩と。此れ則ち仏智及び智門を許し与えるを聞いて、歡喜を与える。此れは是れ牛車を与えるを聞いて、与えて歡喜を生ず。云何が羊鹿車を索むるに称うや。六に喩の文に違す失とは、譬喩品に云わく。「爾の時、長者は各諸子に等しく一の大車を賜う」^⑪と。此れ則ち喩は先ず仏智及び智門を許し与える。云何が羊鹿車を索むるに称うや。七に文に合するに違す失とは、譬喩品に牛車を合する文に云わく。「如来は亦た是くの如し。初めに三乗を説く。然る後に但だ大乘を以て、而して之れを度脱す」^⑫と。此等の文に准じて、舍利弗等千二百人の如く、唯だ牛車を請ひ、鹿車を索めるにあらずと明す。若し身子等、唯だ羊鹿車を索むと言はば、便ち文に合するに違す。譬喩品の羊鹿車を合する文に云わく。「若し衆生有りて、内に智性有り、仏世尊に従り、法を聞きて信受し慇懃に精進して、速やかに三界を出んと欲し、自ら涅槃を求む。是れを声聞乗と名づく。彼の諸子は、羊車を求めるが為に、火宅を出るが如し。若し衆生有りて、仏世尊に従り、法を聞きて信受し慇懃精進して、自然慧を求め、独り善寂を樂い、深く諸法の因縁を知る。是れを辟支仏乗と名づく。彼の諸子は、鹿車を求めるが為に火宅を出んが如し」^⑬と。斯れに理有るに由りて、身子等千二百人、若しくは牛車を索め、若しくは羊車を索む。両俱に失有

り。汝は偏へに文に執し、索車の意を知らず。請うの文を謬り、自ら過失を招く耳。人は然るに三乗各別に自ら乗車を索め、他乗を索めず。譬喩品の説なるが故に。

問う。若し爾らば、舍利弗等千二百人は先ず自乗の三学の果を得て、已に羊・鹿車に乗ず。何故に法花会に至りて更に重ねて索める耶。答う。自乗の無学果を得ると雖も、而して更に妙智を修し、求めて諸法を知る。義を以て各羊・鹿車を求める。

問う。若し爾らば、何故に舍利弗は慇懃に仏智慧及び智慧門を三たび請うとして、許して仏智及び智門と説くや。答う。此れ自他の疑を決せんとす。請うを説くは索車の義に懸らず。何を以て論に就くを知るや。方便品の五分中、第三定疑分^⑭の二乗の人は、自らの所証に於いて、決定の解を生ず。三乗の解脱の床等は、仏智及び門を与える。二乗は知らず。後に更に疑の生ず。斯れに依りて請うにつきて疑を決す。所以に索車の義に應じず。此れ第三分の意也。

次に第四定疑分に云わく。「汝、已に慇懃に三たび請う。豈に説かざるを得んや」^⑮等と。此れ則ち記別の甚深の一乗義なり。此れ第四分の意也。亦た応に牛車を許し与える義にあらず。古人は此の義を知らず。此等の文を引き、大子が牛車を索むるを証すは、甚だ愚癡也。又た彼に云わく。「第二周の譬説の初に身子は中根人の為に請うとす。譬説に許して云わく。当に譬喩を以て、更に此の義を明す。譬説の竟りに迦葉等歡喜す」^⑯と。此れ第二周に請うを許して喜ぶ。亦た周の前、第一周に上根の請うを許して喜ぶ。唯だ許し与える中、但だ因智を一斉に許すが故に、竟りの前に称う。又た彼に云わく。「第三周の下根の為に徒らに請う。文に云わく。善き哉。世尊。願はくは四衆の為に其の因縁を説かん。譬喩品。因縁を許して云わく。我及び汝等の宿世の因縁なり。業草喩品。因縁の竟りに樓那は歡喜す。五百弟子受記品。喜ぶを以ての故に、与え

るが故に請うを知る。三周三義を明かす文は炳然なり。何故に偏へに二乗は車を求め、大子は車を求めずと言うや」^⑧と。此の師の所言は、第三周に請うを許して喜ぶなり。同なるを擱きて初の二周に唯だ許し与える中に、仏果宝所の理の一乗智を許し与え、牛車を請うは、以て竟りの前と為す。今、却りて天台の三周を觀するに、請うを許して喜ぶ意は、三子各別に羊鹿牛車を求めると顯す。若し爾らば、唯だ還りて之れに随うにあらず。七失は亦た復た『法花』の本意に違す。『法花』の本意は是れ羊鹿車を与えんと欲する耶。汝は索車を知らず。竟りに偏へに『文句』に依りて、三乗共に同じく三車を求めんと執す。甚だ愚癡なる耳。

今、三周に許し与えるの文、及び聞いて歡喜するの文を觀るに、唯だ聞いて、仏智及び智門を許し与えるの中、車を与え歡喜す。此れに准じて応に知るべし。三周に請う文は、唯だ仏智及び智門の牛車を請い、羊鹿車を求めず。問う。若し爾らば合に違す。譬喩品に云わく。「時に諸子等は、各父に言を白す。父の先ず許す所の羊車・鹿車・牛車を願う時に賜与す。爾の時、長者は各諸子に等しく一の大車を賜う」^⑨と。下に文を合して云わく。「若し衆生有りて。乃至。是れを声聞乗と名づく。彼の諸子の羊車を求めんが為に、火宅を出んが如し。若し衆生有りて。乃至。是れを聲聞乗と名づく。乃至。是れを辟支仏乗と名づく。彼の諸子の鹿車を求めんが為に、火宅を出んが如し。若し衆生有りて、是れを大乘と名づく。彼の諸子の牛車を求めんが為に、火宅を出んが如し」^⑩と。若し二子の羊鹿車を索むと言はば、便ち違す。『法花』の方便品に云わく。「唯だ一乗有りて、二も無く三も無し」^⑪と。故に法と喩は既に別なり。云何が合を成ずるや。各『法花』の本意は、別して大乘を退いた後、本より習う所と為す。余の意趣にあらず。則ち喩品の如く、四十年前には三乗を顯すが故に。三子は各別して三車を求める。法品に法花会の一乗を顯すが故に。一乗有りて、二も無く三も無し。此の後、云何が四十年前に舍利弗等二

乗は根機未熟なると説くや。「一仏乘に於いて、分別して三と説く」^⑫と。此れ則ち三乗有りと言くを顯す。此れを合して当に二乗に与えるを捨てるべし。當に仏乘を得るに、各三乗有るべし。法花会に至りて、不定性の二乗は根機熟すに抛りて、堪えて仏記を受けるが故に。唯だ一乗有りて、二は無く三も無しと説く。天台は、菩薩は車を求めずと難じて会す。「其の五。唯だ此れ一事のみ実なり。即ち此れ真なり。那ぞ忽ちに復た索むるなり。會被むる絶待の唯一は、一の外に更に法無し。昔の二の待つ唯一は、一の外に更に法有り。一の名は同じくして、而も体は異なり」^⑬と。此の師は法花円教は一乗絶待の唯一にして外に更に法無しと顯すべし。唯だ此の一事実に称わんと欲す。三乗の中の大乘は二乗の唯一を待つが故に。一の外に更に一乗と異なること有るが故に。唯だ此の一事実に称わらず。此の難は理にあらず。

何を以て故に、三乗の外に更に第四の円教一乗を立てるや。前に已に証を破すが故に、徒らに詰を設ける。天台の詰難に、菩薩は車を求めざる人なりとは、「其の八。若し菩薩が菩薩の車を求めれば、心に領解すべきこと既に無きが故に、求めざるを知る。汝は聞かずや。法説の竟りに、天龍四衆は皆領解す。其れ菩薩に非ずして、是れを何をか謂わん耶。又た法品の中に、三乗に皆、記を与える。若し領解せざれば、那ぞ忽ちに記を与えるや」^⑭と。汝は空しく詰難を設け、兼ねて妄語を説く。汝の言う所の「法説の竟りに、天龍四衆は皆領解す」^⑮とは、譬喩品に云わく。「爾の時、四部の衆たる比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷と、天龍八部は舍利弗の仏前に於いて阿耨多羅三藐三菩提記を受けるを見るに、心は大いに歡喜す」^⑯と。此れ他の仏記を受け、而して隨喜を生ずを見る。如何、此れ菩薩の車を求めるを証する耶。此れ復た難を設ける。又た彼に云わく。「法品中、三乗に此れ記を与える」^⑰とは、此れ唯だ妄語なり。方便品中、都て三乗に記を与える文の有ることなし。

如何。妄語に迷いて後の学徒は、彼の領解を以て、三乗の授記を証す。其れ愚癡なる耳。又た苟も天台は菩薩の車を索めるの義を以て、自らの四教に配す。別に与える簡別は徒に劬勞を設ける。何を以の故に、自ら造る教を各仏の經に配属するや。前に已に証を破すが故に、用う可からず。此の如く推究するに、「天台の立つる所の三乗中の大乘は權、円教の一乗は実、水牛は權、白牛は実なり」^⑧といはば、唯だ虚言有りて、都て実義無し。是の故に、応に三乗の解は更に別乘無しと信ぜずべし。

法藏師の車を索める義の文を破す。

法藏師云わく。『若し彼の三の中、牛車は是れ実ならば、如何、竟りに出んや。得ざるを以ての故に、後に更に索むる耶。亦た界外に車を索むるは、但だ是れ二乗なりと説く可からず。以て經には説かず。彼の牛車を求むる人の門を出るは、即ち彼の牛車を得るを説かざるが故に。是の故に經に云わく。「諸子は出るを得て露地に至り已る。各、父に言を白す。父は先ず羊車・鹿車・牛車を願う時に与え賜うと許す所なり」^⑨と。此れを以て三車を同じく索むと知るを得る。乃至。彼の三人に廻らして、一乗に入れんと欲すと為すが故に。是の故に大乘は亦た廻を説く也』^⑩と。已上、彼の『五教記』上巻に出る。

今謂わく。爾らず。汝は門外に迷い、露地に出るに迷い、索車の義に迷うと言ふ。今、當に指示すべし。門外に二有り。一に分段の宅門外なり。二に變易の宅門外なり。分段の宅門外とは、此れに亦た二有り。一に二乗の分段の宅門外なり。二に菩薩の分段の宅門外なり。二乗の門外とは、二乗の無学果を得ずして、分段死を離れ、永く三界を出る。是れを門外と名づく。亦た舍利弗等の二乗の如く、無学果を得て、分段の門外を出て、三界を離す。而れば未だ牛車に乗らずして、牛車に乗るを得るが為に、三慧を修習し、初地を求め調るなり。是れを索牛車と名づけ

る。法花会の中の受記は、彼を以て二万劫遅れ、方に十信に到る。猶、索牛車と名づけ、索羊・鹿車と名づけず。此れに従りて後に更に一阿僧祇遅れて初地に至る時に方に索牛車と名づく。頓悟の菩薩は初地に於いて証し、永く分段死を出る。是れを門外と名づく。是れ頓悟・漸悟は、義を以て三乗子と同じく一牛車に乗ると名づく。而るに猶、三子索牛車と名づけ、索羊・鹿車と名づけず。何を以ての故に廻心向大す。二乗を厭い捨てるが故に。言う所の變易の門外は、初地従り更に二阿僧祇遅れ、妙覺位に登り、永く變易の宅を出る。是れを變易の門外の露地と名づく。唯だ門外に彼の所難を知る可し。若し彼の三の中の牛、亦た是れ実ならば如何とす。竟りに出て以て得ざるが故に、後に更に索める耶。

今、我れ具に外門を指示し、索車の義を指示す。更に迷う可からず。且く身子等の二乗の無学の如く、廻心向大し、分段身を捨て、變易身を得て、三慧を修習し、求めて初地を証す。是れを分段の宅門外を出て、索牛車と名づく。索車と名づけず。実にあらざるが故に、更に実の車を索める。彼の身子等の漸悟菩薩は初地を証し已りて、後に更に無漏の三慧を修習し、求めて仏果を証す。是れを索牛車と名づく。彼の初地所証の妙覺、平等中の一切種智は実にあらずと謂うにあらざるが故に。更に実の車を索めることは爾らず。下地を詮じて進みて上階を超える。応に大乘を詮じて、一乗を得ると名づく。若し爾らば、三乗中の大乘は是れ頓悟が応に頓悟を詮じて、漸悟を得るべし。

又た彼を難じて云わく。「亦た界外の索車は但だ是れ二乗なるのみと説く可からず。經は以て彼の牛車を求める人を説かず。門を出て即ち彼の牛車を得るが故に」^⑪とは、此れ亦た爾らず。汝は「臨門の牛車と露地の白牛を執するに由りて権実を各別とす」^⑫と。亦た索車の義を知らず。是くの如く此の義に迷惑して前に開示するを授と指すが故に、更に述べず。汝は『法花』の意を知らず。妄りに詰難を設ける。『法花』の

大意は、退大の二乗を引く為に、合して大乘を得るにあらず。別の意趣にはあらず。不定性の二乗の身中に具さに三乗の種姓有り。四十年前に其の大乘の根の未熟なるを以ての故に、二乗を厭わず、大乘を欣わず。説いて三乗有るが故に、説いて「一仏乘に於いて、分別して三と説く」^⑧と。法花会に至り、其の根の淳熟し授記を聞くに堪え、劣なる二乗を厭い、勝たる大乘を欣うが故に、唯だ一乗有りて、二乗有ること無しと説く。斯れに依れば理の一有り。舍利弗等は義を以て名づけて三乗衆と為す。二乗衆を捨てて一乗を得る。合して三乗と名づけ、而して三子と名づく。決定菩薩・決定独覚・決定声聞を名づけて三乗と為し、而して三子と名づくと言うにはあらず。何を以ての故に、法花会の中に於いて決定二乗に仏記を作すを授けず。亦た決定菩薩に仏記を作すを授けざるが故に、決定の三乗は一牛車に乗るとは名づけざるや。三子の数に入らず。

問う。決定の三乗を三子と名づけ、一牛車に乗るに、何の妨が有りて許さざるや。答う。決定の二乗に各、一姓有るも勝姓は有ること無し。何ぞ勝姓に於いて、何の劣姓に従うと説く。一仏乘に於いて分別して三と説くとは、亦た後に詮するなり。何ぞ劣姓は何の勝姓を得ると説くや。「唯だ一乗有りて、二も無く三も無し」^⑨と。然るに菩薩大子の索めるを与えんと、索めずとは、俱に失有ること無し。前に已に数を述べたる。是の故に、汝の難とする所は、大子の車を索めるに於いて門を出るが故に、「大乘は権にして此に於いて唐捐す」^⑩と。是の故に、汝は今当に知るべし。臨門の牛車は即ち露地の白牛なり。露地の白牛は即ち臨門の牛車なり。則ち、大乘則一乗、一乗即大乘と知るべし。此の二の体

に、二無く別無しと云々。

三、『中辺義鏡殘』「破索牛車義文」大意

藏俊撰『法華玄贊文集』卷八十「一乘義 三車五 索車諍文」の墨付六丁裏十二行く十二丁裏四行は、「牛車を索める義の文を破す」と題されており、徳一撰の『中辺義鏡殘』六上の引文である。

まず、天台智者法師の文、即ち天台大師智顛（五三八く五九七）撰『妙法蓮華經文句』が引用されている。この引文で智顛は、『妙法蓮華經』の三車火宅の喩について、『法華經』の三周の説法と合して自説を述べている。

三周説法とは、法説周（第一周）・譬説周（第二周）・因縁周（第三周）の三説法のこと、『法華經』以前、すなわち釈尊成道後、四十年前以前の諸経では不成仏とされていた声聞に対して、釈迦仏はその機根（上・中・下根）に応じて、三段階に法門を説き、成仏を許し記別を授けたという。初めに方便品で十如実相の法門を説き、開三顯一を明かして上根の声聞である舍利弗を得道させたことを法説周という。次に譬喩品（三車火宅の譬）、信解品（長者窮子の譬）、菓草喩品（三草二木の譬）、授記品で、譬喩によって迦葉、目連等の中根の声聞を得道させたことを譬説周という。最後に法説・譬説で領解できない阿難、富楼那等の下根の声聞に対して、化城喩品で三千塵点劫以来の師弟の宿世の因縁を説き、得道させたことを因縁周というのである。

智顛は、三子、即ち声聞・独覚・菩薩の中、声聞と独覚は火宅の中で車を索めるが、菩薩は車を索めないのだという義について、釈尊が三周の説法を行う理由は、弥勒を首とする菩薩衆が請うたからだとする。ただし、天台教学の化法の四教の分類によれば、菩薩の中の三蔵の菩薩は、煩惱を断じていないので、車を索めず、通教の菩薩は、煩惱を断じてから車を索めることがあり、別教の菩薩は、まだ三惑を断じていない

ので、車を索めるものも、索めないものもあり、円教の菩薩は、三惑を断ずるものでもなく、車を索めるとも、索めないともしないと断るのである。

この『妙法蓮華經文句』の引文について、徳一は、「惣じて破す」と「別に破す」と述べる。「惣じて破す」については、まず、智顛が、菩薩が索める牛車の体を諸法の実相であるとし、最澄が『守護国界章』において、諸法の実相とは真如であるとしていることを指摘する。そして、菩薩はその能力に従って三乗の悟りのすべてを証しているもので、更に牛車、即ち真如を索める必要がないという。『法華經』の三周説法では二乗のみが仏記を授けられるが、菩薩がその説法をまたずに仏記を授けられているのであれば、請うから与えられるのだという道理は成り立たないのだとするのである。また、「別に破す」とは、智顛が、菩薩衆の中、弥勒が首となり、仏口より生じる子が八万いて、合掌し敬心をもって、悟りに至る道を聞くことを欲すると述べていることは矛盾であるという。『法華經』には、「仏口より生じる子」の願いを与えるという記載はない。また、等覚の菩薩である弥勒を含めた菩薩衆のすべてが牛車を索めるわけではない。三周の説法では、菩薩に仏記を授けるわけではない。三周の説法で、菩薩が索めれば仏記を与え、索めなければ仏記を与えないとすべきである。十地以前、十地以上の菩薩とともに、仏果である車を索めるから、最終的には与えることにはなるが、三周の説法中には、仏果を索めないものもいると知るべきだというのである。

また、智顛は、「譬喩に合わせた文は、菩薩に宝乗が与えられたことを示しており、与えられたということは、菩薩が請うたからである。なぜ、二乗は車を索めるが、菩薩は車を索めないというのか」とするが、それも誤りである。智顛等は、車を索めることの意味を知らず、『妙法

蓮華經』に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷と示される「四衆」について誤った解釈をほどこしているが、徳一は『妙法蓮華經』を引用して、諸菩薩、及び声聞衆のことであると断ずる。經文によれば、菩薩のすべてが車を索める証にはならないというのである。

『妙法蓮華經』の譬喩品と方便品を併せて解釈すれば、ただ車を索めることのみ述べられており、車に乗ることまでは説かれていないが、智顛は、譬喩品のみによって、ただ車に乗ることを述べ、車を索めることを述べていないというのである。

また智顛は、「法師品中に、身子が三たび請うとは、羊・鹿車を索めることであり、牛車も索めることである。または、ただ羊・鹿車を索め、牛車を索めることではない」というが、それには七失があるという。

一に得てすでに更に索める失とは、舍利弗等の千二百人は、初に説かれる四諦の教の時に、すでに分断の宅で、二乗の無学果を得て、羊・鹿車に乗ることができているので、法花会に至り、さらに羊・鹿車を索める必要はない。

二に請うの文に違ふ失とは、『法華經』に「初めに身子は仏の言を請う」と説くが、仏説は深く、すべての声聞・辟支仏等が請うことができものではない。仏の智慧門を請うことは、牛車を索めることに他ならないので、車を索めることが、すなわち羊・鹿車を索めることではない。

三に許し与うに違ふ失とは、舍利弗等はずでに慇懃に三たび請うのに、どうして説かないことがあるだろうかとするが、『法華經』に「このような妙法を、諸仏如来は、その時に説く。諸仏世尊は、ただ一大事の因縁によって、世に出現す」とあるので、智及び智門を与えることを許していることになり、牛車を許すことになる。しかし、智及び智門を許し与えられるはずがない二乗が羊・鹿車を索めて、許し与えられるこ

とではない。

四に遮に違す失とは、『法華経』に、「如来はただ一仏乗を説くために、衆生のために説法する。他の乗、たとえば二乗、もしくは三乗はない」という。これは二乗の教えを遮し、仏智及び智門のみが説かれることになり、牛車を許し与えることになる。これも羊・鹿車を求めることはならない。

五に歡喜に違す失とは、譬喩品の初に身子が歡喜して、「今、仏より聞く所の未曾有の法は、諸の疑悔を断じて、身も意も泰然である」とある。これは、仏智及び智門を許し与えることを聞いて、歡喜を与えることである。これは牛車を与えることを聞いて、与えられれば歡喜を生ずることである。これも羊・鹿車を求めることとはならない。

六に喩の文に違す失とは、譬喩品に、「その時、長者は各諸子に等しく一の大車を賜う」とある。これは、喩において先ず、仏智及び智門を許し与えることである。これも羊・鹿車を求めることとはならない。

七に文に合するに違す失とは、譬喩品の牛車を合する文に、「初めに三乗を説き、その後、ただ大乘によって度脱させる」とある。これらの文に准じて、舍利弗等千二百人のように、ただ牛車を請い、鹿車を求めるのではないと明す。もし、身子等がただ羊・鹿車のみを求めるといえば、文に合することと矛盾する。譬喩品の羊・鹿車を合する文に、「もし衆生の内に智性があり、仏世尊により法を聞いて信受し、慇懃に精進して、速やかに三界を出ることを欲し、自ら涅槃を求めらるるなら、これを声聞乗と名づける。これらの諸子は、羊車を求めるので、火宅を出ようとするのである。もし衆生が、仏世尊により、法を聞いて信受し慇懃に精進して、自然慧を求め、独り善寂を願ひ、深く諸法の因縁を知るなら、これを辟支佛乗と名づける。これらの諸子は、鹿車を求めるので、火宅を出る」とある。このような道理があるので、身子等千二百人の中

には、牛車と羊車を求めるものがいるのである。両者に失があるという。

智顛は、索車の意を知らず。請うの文を誤って解釈し、自ら過失を招いているのである。人は、三乗各別に自ら乗車を求め、他乗を求めない。譬喩品に説くことが証拠であるとするのである。

そして、二の問答を述べている。初の問答では、舍利弗等千二百人は、声聞の三学の果、即ち無学果を得ているので、何を求めるのか問ひ、妙智を修し、諸法を知ることと求めるので、羊・鹿車を求めることになるのだと答え、次の問答では、何故に舍利弗は仏智慧及び智慧門を三たび請うのかと問ひ、自他の疑いを晴らそうとしているのであり、これは請うを説くことで、索車の義とは別義であるという。二乗は仏智及び門を知ることではないが、後にさらに疑が生じるので、請うことによつて疑を晴らすのである。それ故、索車の義とは別義であると答えるのである。

次に第四の定疑分に、「舍利弗はすでに慇懃に三たび請う。どうして説かないことがあろうか」などというが、これは甚深の一乗義が説かれることを意味している。しかし、これは牛車を許し与えることではない。これらの文を引用し、菩薩が牛車を求めることと同義だと証明することは愚かなことである。また、智顛は、「第二周の譬説の初めに、身子が中根人のために請う。そして、譬説の終わりに迦葉等が歡喜する」という。これは第二周に、請うを許して喜ぶことである。また第二周の前、第一周に上根が請うことを許して喜ぶという。また、智顛は、「第三周に下根のために徒らに請うとし、因縁の説の終わりに、富樓那は歡喜する」という。喜ぶことによつて、さらに与えることによつて請うたことが分かる。三周三義を明かす文に矛盾はない。どうして二乗は車を求め、大子は車を求めないと言えるのか」という。この師の所言は、第三

周で請うを許して喜ぶのだとする。三周すべてにおいて、各々が請うものを許し与えることは同じであるとするが、初の二周で許し与えることを述べる中に、仏果宝所の理の一乗智を許し与え、牛車を請うを譬説の終わりの前とする。今、天台宗の三周の解釈を検討するならば、請うを許して喜ぶ意は、三子が各別に羊・鹿・牛車を求めることをあらわしている。もしそうであるならば、三周すべてにおいて、各々が請うものを許し与えることは矛盾する。先述の七失にある通り、『法華経』の本意とは異なっているのである。『法華経』の本意は、羊・鹿車を与えようとするのではないのであろうか。智顛は索車の意味を知らない。譬説の終わりについて、『妙法蓮華経文句』によって、三乗が共に三車を求めるのだととらわれることは、愚かである。

今、智顛は、三周すべてで許し与えるという文、及び聞いて歓喜するという文について、ただ聞いて、仏智及び智門を許し与えることと、車を与え歓喜することだというのが、これについて、三周すべてで請うという文は、ただ仏智及び智門の牛車を請い、羊・鹿車を求めるものではないという。もしそうであれば、譬説と合することに矛盾する。譬諭品には、「父が先ず許す所の羊車・鹿車・牛車を願う時に賜与する。その時、長者は各諸子に等しく一の大車を賜う」とあり、下に文を合して、「声聞乗の子が羊車を求めるので、火宅を出る。辟支仏乗の子が鹿車を求めるので、火宅を出る。大乘の諸子が牛車を求めるので、火宅を出る」とある。もしも二子が羊・鹿車を求めることのみをいえば、矛盾が生じる。『法華経』方便品に、「唯だ一乗があり、二もなく三もなし」という。故に方便品に説かれる法と譬諭品の譬諭は別なのである。『法華経』の本意は、大乘を退いた声聞が、本より習う教えである。他の意趣はない。二乗に一乗を与えるという考えを捨てるべきである。仏乗を得る者には、各々三乗の者がいるはずである。法花会に至って、不定性

の二乗は根機が熟せば、仏記を受けることができるので、ただ一乗のみがあつて、二はなく三もなしと説くのである。

天台宗は、菩薩が車を求めずと解釈しており、智顛は、法華の円教は、一乗絶待の唯一であり、外に法はないとあらわし、ただ、この一事実のみで理解している。しかし、三乗の中の大乗は、二乗の唯一を待つので、一の外に一乗があるから、ただ一事実のみがあるとはいえないことになり、道理にあわないことになるのである。なぜ、三乗の外に第四の円教一乗を立てるのであろうか。前に三乗の証を破しているので、むやみに詰難しているのである。また、天台の詰難では、菩薩は車を求めない人であるとし、智顛は、菩薩が菩薩の車を求めても、領解すべきこととはなく、索めないものであるとしながら、法説の終わりに、天龍四衆が皆、領解するので、彼らを菩薩とし、法師品の中では、三乗に皆、記を与えるという。しかし、譬諭品に、「その時、四部の衆である比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷と天龍八部は、舍利弗が仏前で阿耨多羅三藐三菩提記を受けるのを見て、心が大きいに歓喜する」という。他の者が仏記を受けるのを共に喜ぶことを見るのである。これは、菩薩が車を求めることを証することにはならないのである。また、智顛は、三乗に記を与えるという。しかし、方便品の中には、都ての三乗に記を与えるという文はない。妄語に迷う後の天台宗の学徒は、智顛の領解によって、三乗の授記を証しているが、愚かなことである。また、天台宗は、菩薩が車を求める義によって、『法華経』を自らの四教に配している。なぜ、自ら造る教で、各々の仏の経を配属するのか。このような理解なので、最澄の「天台の立てる三乗中の大乘は権、円教の一乗は実、水牛は権、白牛は実である」という文は、虚言であり、全く実義はない。それ故、三乗の領解には、別乗の領解までは含まないと信じるべきだといふ。

四、「中辺義鏡殘」「破法藏師索車義文」大意

藏俊撰『法華玄贊文集』卷八十「一乘義 三車五 索車諍文」の墨付十二丁裏五行、十四丁表十行は、「法藏師の車を索む義の文を破す」と題されており、これも、徳一撰の『中辺義鏡殘』の引文である。

まず、法藏師の文、即ち賢首大師法藏（六四四〜七一）撰『華嚴一乘義分齊章』が引用されている。この引文で法藏は、火宅中の三子が求める臨門の牛車と、火宅を出て露地に座してから与えられる露地の牛車について、臨門の三車の中、牛車が実ならば、なぜ終わりに露地の牛車が出されるのか。まだ得ていないから、後にさらに車を索めるのかと問う。また露地、すなわち三界の外に車を索めるのは、ただ二乗のみならず、菩薩も索めるのだという。それ故、経には説かれない。臨門の牛車を求める人が、門を出ても、彼が牛車を得ることが説かれていないからである。『法華経』に、「諸子は門を出て露地に至ってから、各々父に言う。父は先ず羊車・鹿車・牛車を願う時に、与え賜うと許すのである」という。これによって三車を同じく索めるのだと知ることができるとするからである。それ故、大乘の教えもまた伝えようとするのであるという。

それについて、徳一は、この文は理に合わない。法藏は門外の露地に出ることと、索車の義に迷っているという。門外に二つの意があり、一分段（三界内において、寿命に限りのあること）の宅門の外であり、二に変易（三界を離れ、寿命を自在にできること）の宅門の外である。分段の宅門の外にはさらに二があり、一に二乗の分段の宅門の外であり、二に菩薩の分段の宅門の外である。二乗の門外とは、二乗の無学果を得ないまま、分段死を離れ、永く三界を出ることである。舍利弗等の二乗

のように、無学果を得て、分段の門外を出て、三界を離れる者もいる。そうであれば、まだ牛車に乗らずに、牛車に乗ると同等のさとりを得るので、三慧を修習し、菩薩の初地を求めることになる。これを牛車を索めるとする。法花会の中の受記について、舍利弗は二万劫遅れて、やがて菩薩の十信位に到るといふ。これも牛車を索めることになり、羊・鹿車を索めるとはいわれない。このことから、後にさらに一阿僧祇遅れて、初地に至る時に牛車を索めることを、索めるとするのである。頓悟の菩薩は初地に至って真如を証し、永く分段死を離れることができる。これを門外とする。これらの頓悟・漸悟の菩薩は、その意によって三乘子と同じく一牛車に乗るといふ。しかし、三子が牛車を索めるとし、羊・鹿車を索めるとはしない。どうして廻心向大することを示せるのか。二乗を厭い捨てるので、変易の門外は、初地よりさらに二阿僧祇遅れ、妙覚位に登ってはじめて永く変易の宅を出ることができるとする。これを變易の門外の露地とする。ただ門外というのみではすべてを説きつくすことができないのである。もし、三車の中の牛車が実であるとすれば、法花会の終わりに門を出ても、まだすべてを得られていないので、後にさらに索めるのであろうかという。

今、徳一は門外を指示し、索車の義を指示した。身子等の二乗の無学は、廻心向大し、分段身を捨て、変易身を得て、三慧を修習し、初地を証することを求める。これは分段の宅門外に出ることを牛車を索めるとするのである。単に車を索めるとはしない。実ではないので、さらに実の車を索めるのである。身子等の漸悟の菩薩は、初地を証し終わって、後にさらに無漏の三慧を修習し、仏果を証することを求める。これを牛車を索めるとする。初地に証する妙覚、平等の中的一切種智は実ではないといえない。さらに実の車を索めるとはいえないのである。前の階位を理解し、さらに進んで上の階位を超えることは、大乘を理解して、一乗を

得ることである。もしそうであれば、三乗中の大乘は、頓悟が、頓悟を理解して、漸悟を得るということになってしまっているのではないかと。また、法藏は三界の外で車を求めることは、ただ二乗のみが行うと説いていないが、『法華經』には牛車を求める人を説いていない。門を出てから牛車を得るからであるという。これも道理に合わない。また、最澄は、臨門の牛車と露地の白牛にとらわれて権実を各別とする。彼は索車の義を知らないのである。この義に迷惑して、前に開示された牛車を授かるとするので、後に授かる牛車について述べていないのである。最澄は『法華經』の意を知らない。妄りに詰難を設けている。『法華經』の大意は、大乘を退いた二乗について述べているので、すべてのものが大乘を得ることを述べていない。不定性の二乗の身中に三乗それぞれの種姓がある。四十年前には、大乘の根が未熟な者がおり、二乗を厭うわけではないが、大乘を欣んでいるわけでもない。三乗の者がいるので、「一仏乘に於いて、分別して三と説く」というのである。法花会に至って、その根が淳熟し、授記を聞くに堪え、劣なる二乗を厭い、勝れた大乘を欣うので、ただ一乗があり、二乗はなしと説くのである。これによれば、理の一乗はあるが、舍利弗等を三乗衆とし、二乗衆を捨てて一乗を得ることを合して三乗とし、三子とする。決定菩薩・決定独覚・決定声聞を三乗とし、三子とするわけではない。なぜ、法花会の中で、決定二乗に仏記を授けないのであろうか。また決定菩薩に仏記を授けないので、決定の三乗は一牛車に乗るとしないのであろうか。これらは三子の数に入らないのであるという。

そして、最後に問答を記している。問う。決定の三乗を三子と名づけ、一牛車に乗ることを許さないのか。答う。決定の二乗に各々一姓があるが、勝姓はないのである。どうして勝姓が劣姓に従うと説くのか。一仏乘に於いて分別して三と説くとは、後に理解することである。

どうして劣姓が勝姓を得ることができるかと説くのか。「ただ一乗のみあって、二もなく三もなし」といえば、菩薩大子が求めるものを与えることと、索めないことには、ともに過失はない。前に数について述べているので参照されたい。それ故、最澄の難とは、大子が車を求めるために、門を出るのは、大乘は権であるから、むなしく捨てるからだとするところにある。それ故、最澄は、次のように知るべきである。臨門の牛車は、露地の白牛のことである。露地の白牛は臨門の牛車である。つまり、大乘は則ち一乗であり、一乗は即ち大乘なのである。この二の体は、二ではなく別のものでもないのである。

五、結

『法華玄贊文集』巻八十の「索車諍文」の中、五、『中辺義鏡殘』第六「破索牛車義文」と、六、『中辺義鏡殘』第六「破法藏師索車義文」は、藏俊が、徳一の『中辺義鏡殘』を引用したものである。当該の引用文は未活字であり、貴重な資料である。

「破索牛車義文」では、天台宗の智顛と最澄の索車理解と、法相宗での索車理解の相違が述べられている。天台宗では、声聞、独覚、菩薩が火宅の門中で、羊車、鹿車、牛車を求めるが、門外に出れば、大白牛車が与えられるという『法華經』の譬喩について、二乗は車を求めるが、菩薩の中には、牛車を求める者もいれば、索めない者もいると解釈する。これは、牛車を三乗中の権大乘、大白牛車を実の一乗とするからである。すべてのものに法華円教の一乗の教えが授けられるということを示す証明しようとしているのである。

それに対して、法相宗の徳一は、声聞・独覚・菩薩の三乗は、各々の悟りを求めるので、菩薩は牛車を求めるものであるとし、菩薩には牛車を

索めるものも、索めないものもいるという天台の説を七失で詳細に批判する。これは、法相宗では、牛車を大乘、すなわち三乗中の菩薩乗とし、大白牛車を一乗とし、どちらも実とするからである。これは、天台宗の教えである化法の四教に基づいた『法華経』理解への批判でもあろう。

「破法蔵師索車義文」では、華嚴宗の法蔵と、それを引用する最澄は、門外の露地に出ることと、索車の義に迷っているとする。法蔵は、火宅中の三子が索める臨門の牛車を三乗の中の大乗とし、火宅を出て露地に座してから与えられる露地の牛車を一乗とする。つまり、火宅の三子はまず、三乗それぞれのさとりを求め、そのうち菩薩は大乗のさとりを求めるが、露地に至って与えられるのは一乗のさとりだとするのである。また、最澄は、菩薩が火宅の門を出るのは、大乘は権であるから、それを捨て、一乗を求めるからだとしている。

それに対して、徳一は、まず、門外の露地を分段の宅門の外と変易の宅門の外に二に分類し、分段の宅門の外を、さらに二乗の分段の宅門の外と、菩薩の分段の宅門の外に分類して、門外の露地にも寿命に限りのある分段身の者と、寿命を自在にできる変易身の者、さらには、同じ分段身であっても、二乗の者と、菩薩とでは、索める牛車、すなわち悟りのレベルが異なることを述べる。法蔵や最澄の露地に至れば、すべてのものが同じ一乗のさとりを得られるのだという説を批判するのである。また、徳一は、臨門の牛車は露地の白牛のことであり、大乘はすなわち一乗のことであるとして、法蔵と最澄を批判する。これは、三子とは、法相宗で説かれる五姓各別の教えの中の決定菩薩（成仏）、独覚独覚（不成仏）決定声聞（不成仏）の三乗ではなく、不定種性の三乗のことが述べられているとの法相教学による『法華経』理解が背景となった主張である。

紙数の都合により、『中辺義鏡残』七「索車義残決」の引文の考察

は、次の機会に譲る。

【註記】

- ①「爾時大衆中。有諸声聞漏尽阿羅漢阿若憍陳如等千二百人。及発声聞辟支佛心比丘比丘尼優婆塞優婆夷。各作是念。今者世尊。何故愍勸称歎方便而作是言。仏所得法甚深難解。有所言說意趣難知。一切声聞辟支仏所不能及。仏説一解脫義。我等亦得此法到於涅槃。而今不知是義所趣。爾時舍利弗知四衆心疑。自亦未了。而白仏言。世尊。何因何縁。愍勸称歎諸仏第一方便。甚深微妙難解之法。我自昔来未曾從仏聞如是説。今者四衆咸皆有疑。唯願世尊。敷演斯事。世尊何故愍勸称歎甚深微妙難解之法。爾時舍利弗欲重宣此義。而説偈言。慧日大聖尊。久乃説是法。自説得如是。力無畏三昧。禪定解脫等。不可思議法。道場所得法。無能発問者。我意難可測。亦無能問者。無問而自説。称歎所行道。智慧甚微妙。諸佛之所得。無漏諸羅漢。及求涅槃者。今皆墮疑網。仏何故説是。其求縁覚者。比丘比丘尼。諸天龍鬼神。及乾闥婆等。相視懷猶豫。瞻仰而足尊。是事為何云何。願仏為解説。於諸声聞衆。仏説我第一。我今自於智疑惑不能了。為是究竟法。為是所行道。仏口所生子。合掌瞻仰待。願出微妙音。時為如実説。諸天龍神等。其数如恒沙。求仏諸菩薩。大教有八万。又諸万億国。転輪聖王至。合掌以敬心。欲聞具足道。」（『妙法蓮華経』・大正九・六・上（下）の取意。
- ②「善哉世尊。願為四衆説其因縁。」（『妙法蓮華経』・大正九・十二・中）
- ③「汝已愍勸三請。豈得不説。」（『妙法蓮華経』・大正九・七・上）
- ④「今当復以譬喻更明此義。」（『妙法蓮華経』・大正九・十二・中）
- ⑤「我及汝等。宿世因縁。吾今當説。」（『妙法蓮華経』・大正

九・二二・上)

⑥「令諸子等 日夜劫數 常得遊戲 与諸菩薩 及声聞衆 乘此宝乘 (車・対校本) 直至道場」(『妙法蓮華經』・大正九・十五・上)

⑦「凡居不達之地。何有不索之理。由索故許与。許与故歡喜。今文具有請与歡喜。法說中千二百人。身子為首。慳慳三請。菩薩衆中弥勒為首。仏口所生子。大教有八万。合掌以敬心。欲聞具足道。譬說之初。身子為中根人又總為四衆請。傍為下根請。文云。善哉世尊。願為四衆說其因縁。法說許云。汝已殷勤三請豈得不說。譬說許云。当以譬喻更明此義。

因縁許云。我及汝等宿世因縁。吾今当說。法說竟身子歡喜。譬說竟迦葉等歡喜。宿世說竟樓那歡喜。又合譬文云。令諸子等日夜劫數常得遊戲。

与諸菩薩乘是宝乘直至道場。以喜故知与。与故知請。三周三義明文炳然。何故偏言二索一不索。別駁其一。齊三藏明菩薩不断惑。依法華有四句。謂障除大機會動。障未除大機動。機動則知索。其二云。大乘經無菩薩索小乘果。小品云。三乘之人。同以無言說道。断煩惱入涅槃。断煩惱入涅槃同。何故不索。其三云。三十三心名菩薩。三十四断思尽即成仏。

仏從誰索。此猶三藏義。見障未除大機尚動。况三十三心而当不動。動即知索。其四。菩薩未断習氣無知不索。断尽成仏仏從誰索。此三乘通教義。具縛障存尚大機動。况殘習無知耶。其五。唯此一事矣。実即是真那忽復索。被会絶待之唯一。一外更無法。昔待二之唯一。一外更有法。一名同而体異。闍執瓦礫魚目。謂夜光月形。愚豈而智惑云云。其六。般若已來法華已上。与付財法同。不応有索。汝不聞共不共般若。不共不須索。共者不応不索云云。其七。方便品初。昔說小是方便。不叙昔說大是方便。大非方便。是故不索者。汝不聞寿量品中。我少出家得三菩提。乃至中間若小若大若己若他皆我方便。諸仏亦然。寧得不索。其八。若菩薩索菩薩心領解。領解既無故知不索。汝不聞法說竟。天龍四衆皆領解。其非菩薩謂是何耶。又法師品中。三乘皆与記。若不領解那忽

与記。其九。出三界苦得安穩樂。乃賜乃索。菩薩未出未証。是故不索。

猶是三藏義耳。其十。諸子安坐爾乃賜車。二乘行息名安坐。菩薩行不息非安坐。那忽索車。猶是前義耳。自有行息索行未息索。又菩薩行行。即是乘乘。乘由索得何謂不索。觀其詭累三藏。故設此十難。管見一斑都非大体。今当為爾分別說之。自有不断惑不索車。三藏菩薩是。自有断惑索

車。通教菩薩是。自有亦断惑亦不断惑亦索亦不索。別教菩薩是。自有非断惑非不断惑非索非不索。円教菩薩是。」(『妙法蓮華經文句』・大正三四・七〇・中(下))

⑧「依天台智者。明諸法実相正是車体。」(『妙法蓮華經文句』・大正三四・七・中)

⑨「彼諸法実相。此真如理。」(『守護国界章』・大正七四・二〇六・中)

⑩「鹿食者又云。山家云。經云。皆是一相一種。能生淨妙第一之樂。合上大車譬也。一相是実相。即法身。一種是智。般若。能生淨妙樂。樂即無苦。名為解脱。三德具足名摩訶衍。此亦不爾。違經文故。經云乘此宝車。直至道場故。爾則。十地位中。未得大般涅槃。云何名乘宝車。此說非理。分証故証真如性分。豈不乘宝車哉。其真如性者。本來具衆德。一得一切得。若得大般涅槃。名乘宝車者。何故。經云直至道場。未到果地。已乘宝車。豈不分証乘車哉。性乘。隨乘。得乘次第之故。雖不円義。不次第故。同時具足故。三德円融故。本來乘性三德乘。乘隨相似分証乘。乘得妙覺究竟乘。乘義非一。是故不相違」(『守護国界章』・大正七四・二〇六・下)の取意。

⑪「今案法華三周文。唯有二乘領解文。都無菩薩領解之文。故知。非本所望言。但約二乘不挾菩薩。然明非本所望意。二乘之人。得小涅槃。為自極果。謂大乘是非自分果。故經云。窮子雖欣此遇。猶故客作賤人。即受教勅領知衆物。而無稀取一餐之意。今於法華会中。聞一乘無有二乘。

亦聞授二乗作仏記。是名非本所望。菩薩太子。從始四諦教。終至涅槃教。每聞大乘。常受成仏記。何事希有未曾有。非本所望。」(『守護國界章』・大正七四・二三三・下(二三四・上)の取意。

⑫⑦に同じ。

⑬①に同じ。

⑭⑦の取意。

⑮『妙法蓮華經文句』では、四衆を發起衆・當機衆・影響衆・結縁衆として、以下のように定義している。「四衆旧云。出家在家各二合為四衆。此名局意不周。今約一衆。更開為四。謂發起衆當機衆影響衆結縁衆。發起者。權謀智鑿知機知時。擊揚發動成弁利益。如大象躡樹使象子得飽。所謂發起合集發起瑞相。乃至發起問答等。皆名發起衆。當機者。宿植德本縁合時熟。如糲欲潰不起于座聞即得道。此名當機衆。影響者。古往諸仏法身菩薩。隱其円極匡輔法王。如衆星繞月。雖無為作而有巨益。此名影響衆。結縁者。力無引導擊動之能。德非伏物鎮蔽之用。而過去根淺覆漏汚難三慧不生。現世雖見仏聞法。無四悉檀益。但作未來得度因縁。此名結縁衆。比丘衆既爾。余三衆亦然。」(『妙法蓮華經文句』・大正三四・26・下)

⑯⑥に同じ。

⑰⑥に同じ。

⑱⑥に同じ。

⑲⑥に同じ。

⑳「若有衆生。從佛世尊聞法信受。勤修精進。求一切智佛智自然智無師智如來知見力無所畏慙念安樂無量衆生。利益天人度脫一切。是名大乘。菩薩求此乘故名爲摩訶薩。如彼諸子爲求牛車出於火宅。」(『妙法蓮華經』・大正九・十三・中)

㉑⑦に同じ。

㉒⑦に同じ。

㉓「爾時舍利弗知四衆心疑。自亦未了。而白仏言。世尊。何因何縁。慙歎歎諸仏第一方便。甚深微妙難解之法。我自昔來未曾從仏聞如是說。今者四衆咸皆有疑。唯願世尊敷演斯事。世尊何故慙歎歎甚深微妙難解之法。」(『妙法蓮華經』・大正九・六・中)の取意。

㉔「佛告舍利弗。如是妙法。諸仏如來時乃說之。如優曇鉢華華時一現耳。舍利弗。汝等當信仏之所說言不虛妄。舍利弗。諸仏隨宜說法意趣難解。所以者何。我以無數方便種種因縁譬喩言辞演說諸法。是法非思量分別之所能解。唯有諸仏乃能知之。所以者何。諸仏世尊。唯以一大事因縁故出現於世。」(『妙法蓮華經』・大正九・七・上)

㉕「如來但以一仏乘故爲衆生說法。無有余乘若二若三。」(『妙法蓮華經』・大正九・七・中)

㉖「今從仏聞所未聞未曾有法。斷諸疑悔。身意泰然快得安穩。」(『妙法蓮華經』・大正九・一〇・下)

㉗「爾時長者。各賜諸子等一大車。」(『妙法蓮華經』・大正九・一二・下)

㉘「如來亦復如是。無有虛妄。初說三乘引導衆生。然後但以大乘而度脫之。」(『妙法蓮華經』・大正九・一三・下)

㉙「若有衆生。內有智性。從仏世尊聞法信受。慙歎精進欲速出三界。自求涅槃。是名聲聞乘。如彼諸子爲求羊車出於火宅。若有衆生。從仏世尊聞法信受。慙歎精進求自然慧。樂善善寂深知諸法因縁。是名辟支佛乘。如彼諸子爲求鹿車出於火宅。」(『妙法蓮華經』・大正九・一三・中)

㉚「妙法蓮華經」の方便品に「爾時大衆中。有諸聲聞漏尽阿羅漢阿若憍陳如等千二百人。及發聲聞辟支仏心比丘比丘尼優婆塞優婆夷。各作是念。今者世尊。何故慙歎歎方便而作是言。仏所得法甚深難解。有所言說意趣難知。一切聲聞辟支佛所不能及。仏說一解脫義。我等亦得此法到

於涅槃。而今不知是義所趣。爾時舍利弗知四衆心疑。自亦未了。而白仏言。世尊。何因何縁。慇懃称歎諸仏第一方便。甚深微妙難解之法。我自昔來未曾從仏聞如是說。今者四衆咸皆有疑。唯願世尊。敷演斯事。世尊何故慇懃称歎甚深微妙難解之法。爾時舍利弗欲重宣此義。」（『妙法蓮華經』・大正九・六・上〔中〕とある。

③③に同じ。

③④に同じ。

③⑤に同じ。

③⑥「時諸子等。各白父言。父先所許玩好之具。羊車鹿車牛車願時賜与舍利弗。爾時長者。各賜諸子等一大車。」（『妙法蓮華經』・大正九・一一・下）

③⑦「若有衆生。內有智性。從仏世尊聞法信受。慇懃精進欲速出三界。自求涅槃。是名聲聞乘。如彼諸子為求羊車出於火宅。若有衆生。從仏世尊聞法信受。慇懃精進求自然慧。棄獨善寂深知諸法因縁。是名辟支仏乘。如彼諸子為求鹿車出於火宅。若有衆生。從仏世尊聞法信受。勤修精進。求一切智仏智自然智無師智如來知見力無所畏。愍念安樂無量衆生。利益天人度脫一切。是名大乘。菩薩求此乘故名為摩訶薩。如彼諸子為求牛車出於火宅。」（『妙法蓮華經』・大正九・一三・中）

③⑧「唯有一乘法 無二亦無三」（『妙法蓮華經』・大正九・八・上）

③⑨「於一仏乘分別說三。」（『妙法蓮華經』・大正九・一三・下）

④①「其五。唯此一事実。実即是真那忽復索。被会絶待之唯一。一外更無法。昔待二之唯一。一外更有法。一名同而体異。」（『妙法蓮華經文句』・大正三四・七〇・中〔下〕）

④②「其八。若菩薩索菩薩心領解。領解既無故知不索。汝不聞法說竟。天龍四衆皆領解。其非菩薩謂是何耶。又法師品中。三乘皆与記。若不領解那忽与記。」（『妙法蓮華經文句』・大正三四・七〇・下）

④③に同じ。

④④「爾時四部衆。比丘比丘尼優婆塞優婆夷。天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽等大衆。見舍利弗於仏前受阿耨多羅三藐三菩提記。心大歡喜踊躍無量。」（『妙法蓮華經』・大正九・一一・上）

④⑤に同じ。

④⑥『守護国界章』に、「鹿食者曰。臨門牛車与露地大白牛車。同是一牛車。何以得知。大乘一乘。同是一車。經説。如彼長者。初以三車誘引諸子。然後但与大車宝物莊嚴安穩第一。如來亦復如是。無有虚妄。初説三乘引導衆生。然後但以大乘而度脫之。言初説三乘引導衆生者。仏成道後。四十年前。説三乘五乘差別之果。然後但以大乘而度脫之者。法華會中。説唯一乘無有二乘。若謂三乘中大乘是權。一乘為実者。經底云然後但以一乘而度脫之。如何言大乘。準此經文。明知。大乘一乘。同是三車中牛車。山家救曰。此尋不爾。迷同名故。一大同異。上章已決。鹿食者迷而牛同名。鳳号不一。雖遇良医。畢死難免。但待善星期耳。貶無為宝牛。等有為權牛。豈非卑下慢哉。」（大正七四・二三三・上〔中〕）とある。また、『妙法蓮華經文句』に、「尋文可解。從是時諸子各乘大車下。第四適願歡喜。譬上受行悟入。本求羊鹿水牛期出分段。今得白牛尽於變易。過本所望豈不歡喜。」（大正三四・七二・下）とある。三車中の牛車を「水牛」と表記したのであるうか。

④⑦「是時長者。見諸子等安穩得出。皆於四衢道中露地而坐。無復障礙。其心泰然歡喜踊躍。時諸子等。各白父言。父先所許玩好之具。羊車鹿車牛車願時賜与。」（『妙法蓮華經』・大正九・十二・下）の取意。

④⑧「若彼三中牛車。亦是実者。長者宅内引諸子時。指彼牛車祇在門外。此心亦出即得見車。如何出竟至本所指車所住処而不得故。後更索耶。亦不可説界外索車但是二乘。以經不説彼求牛車人。出門即得彼牛車故。又不説彼索先許車唯二乘故。是故經中諸子得出至露地已。各白父言。父先

所許玩好之具。羊車鹿車牛車願時賜与。以此得知三車同索。此中三車約彼三乘所求果說。以是元意所標趣故。問二乘各得小果。何以界外更索耶。答依小乘。云有教有行果。今依大乘。云昔日但有言教無實行果故。故云三車空無。若望自宗並皆得果。若不得者如何出世。今言俱不得者。以望一乘故。是故以美映權則方便相尽。故皆無得也。為欲迴彼三乘人入一乘故。是故大乘亦說迴也。」（『華嚴一乘義分齊章』・大正四五・四七七・上〜中）

④⑥「亦不可說界外索車但是二乘。以經不說彼求牛車人。出門即得彼牛車故。」（『華嚴一乘義分齊章』・大正四五・四七七・中）

④⑦『守護国界章』には、「鹿食者曰。臨門牛車与露地大白牛車。同是一牛車。何以得知。大乘一乘。同是一車。經說。如彼長者。初以三車誘引諸子。然後但与大車宝物莊嚴安穩第一。如來亦復如是。無有虛妄。初說三乘引導衆生。然後但以大乘而度脫之。言初說三乘引導衆生者。仏成道後。四十年前。說三乘五乘差別之果。然後但以大乘而度脫之者。法華會中。說唯一乘無有二乘。若謂三乘中大乘是權。一乘為實者。經云然後但以一乘而度脫之。如何言大乘。準此經文。明知。大乘一乘。同是三車中牛車。山家救曰。此尋不爾。迷同名故。一大同異。上章已決。鹿食者迷兩牛同名。鳳號不一二。雖遇良医。畢死難免。但待善星期耳。眨無為實牛。等有為權牛。豈非卑下慢哉。」（大正七四・二三三・上〜中）とある。

④⑧③⑦と同じ。

④⑨③⑥と同じ。

⑤⑩『守護国界章』に、「今法華會中。授声聞作仏記。是名非本所望。菩薩太子。從始覺樹。終至双林。常聞大乘。常受仏記。故授二乘作仏記。於諸菩薩不為非本所望。故譬喻曰。舍利弗言。我等今從仏聞所未聞未曾有法。斷諸疑悔。今日乃知。真是仏子。又信解品迦葉言。我等今於仏

前。聞授声聞阿耨菩提記。心甚歡喜。得未曾有。乃至無量珍寶。不求自得。即窮子喻云。此實我子。我實其父。今我所有一切財物。皆是子有。是時窮子。聞父此言。即大歡喜。得未曾有。而作是念。我本無心有所怖求。今此寶藏。自然而至。是故。非所望言。但約二乘。非拋菩薩。故彼回大乘權。歸一乘實。徒為唐捐。救曰。此說不爾。有菩薩領解故。」（大正七四・二三四・上〜中）とある。